

明治学院大学での研究・教育生活 26 年を振り返って

明治学院大学名誉教授 笹 島 芳 雄

1 着任した頃

2012 年 3 月末日をもって明治学院大学を定年退職いたしました。1986 年に勤務を開始しましたので 26 年間の勤務となります。経ってみれば早いようにも感ぜられますが、やはり 26 年というのは四半世紀に及ぶ長い歲月です。この間にはいろいろなことがありました。本稿では、私の 26 年間の研究・教育生活を振り返ってみたいと思います。

明治学院大学との縁は 1985 年の社会政策論採用人事に始まります。社会政策論は金井信一郎先生が長い間ご担当されましたが、退職してしばらくの間は引き続き非常勤講師として担当していました。そうした中、1980 年代後半には第 2 次ベビーブーム世代が大学進学する時期となり、経済学部でも学生定員の増加を図ることとし、専任教員の増加が必要となりました。そこで社会政策論を担当する専任教員を募集し、幸いにも私が採用されることとなりました。

1985 年の夏に採用面接試験がありました。場所は記念館 2 階の会議室（現在は事務室）でした。

候補者として何人かが面接に臨んだのですが、そのうちの一人は現在は国士館大学教授である梅澤隆先生です。梅澤先生とはここ数年日本労務学会の理事会でしばしば一緒になっております。

当時、私には、東海大学政治経済学部から採用したいとの内々の話がありました。東海大学は意思決定がトップダウン方式の大学のように一本釣りの採用方法でした。しかしいろいろな条件を考えて、明治学院大学の採用人事に賭け、幸いにも採用されたのです。今日と比べて当時はまだまだ大学教員に採用されるチャンスは数多くありました。

1986 年 4 月に着任したのですが、当時の白金キャンパスは今日の状況と比較しますと、見栄えのしない建物群で構成されておりました。学生数が増加するにつれて次々と不細工なコンクリートの建物を建て増していったからです。記念館、インプリー館、チャペルを除きますと、退職時に当時の建物で残っていたのはヘボン館のみです。ヘボン館も耐震工事により外観が変化しておりますが。

大学教員にとって何よりも大切な研究室はヘボン館 3 階に用意されました。といっても採用され

てしばらくの間は研究室の用意が間に合わなかったことから、産業経済研究所（旧本館の3階）の中の机を利用しておりました。着任する少し前までは研究室は2人に1室だったそうです。その点では恵まれた時期の着任となりました。

ヘボン館3階では、佐藤成紀先生が着任するまで、経済学部の教員は私以外にはおらず、社会学部の先生の研究室がほとんどで、他に法学部の先生の研究室がありました。経済学部の先生方はヘボン館の7階か8階に集中しており離れているという不便はありましたが、一方で社会学部や法学部の先生と親しくなれたことはプラスでした。

着任当時は冷房装置がありませんでしたので、毎日、研究室で仕事をする私には、夏は暑くてやり切れませんでした。バケツに水を入れて足を浸したら涼くなるのではとか、冷風扇を購入したりしましたが効果はなく、バスタは扇風機でした。書類が飛ぶという問題はありました。

図書館は現在の2号館のところにありました。カードを繰って必要な書籍を探すという伝統的方法です。しかし不便なので、薄汚れた3階の書庫に立ち入っていろいろな図書を探したことを思い出します。当時と比べて、図書館は大変立派で便利な施設となりました。

大学周辺も着任当時と退職時ではかなり変化しました。今日では大学周辺に高層マンションが数多くありますがいずれも存在せず、当時は新幹線からはヘボン館が見えたという話を聞いたことがあります。高輪警察署、高輪消防署の面している通りも数多くの商店が並んでおりましたが今日ではマンションだらけとなり商店が随分少なくなりました。大学近くにはホテル・メイツがあり、1階はレストランで何かと便利でしたが、ある時期からレストランがなくなり、その後ホテルも廃業し、今はレンタル・スペースとなりました。大

学正門前のローソンの場所もいろいろなお店の変遷がありました。また中古カメラで著名な松坂屋カメラが今の法科大学院の建物の前あたりにあり、その後、新本館前に移り、さらに北品川へと移りました。

2000年に南北線が開通しましたが、白金高輪駅の名称を明治学院大学前駅とする動きがありました。卒業生で千葉県知事の森田健作さんが衆議院議員として運輸政務次官であったときに、明治学院大学前駅の実現に動いてくれたとのことでした。ゼミ生の結婚式で私の隣が森田さんであったことからその経緯についていろいろとお聞きしました。

退職時につくづく思ったのは、学内・学外の写真をたくさん撮っておくべきだったということです。この点は大失敗です。

2 教育生活

(1) 社会政策論

先に触れましたように私の主たる担当科目は社会政策論です。経済学部第I部と第II部の社会政策論を担当しました。

社会政策論は大変歴史のある学問領域です。社会政策の語源はドイツ語の sozialpolitik です。ドイツでは1873年に社会政策学会が創設され、それを受けてわが国でも1897年（明治30年）に社会政策学会が創設されます。後者については高校の日本史の教科書にも記述されています。ドイツでどうして社会政策という言葉が生まれたかという点、後発資本主義国であるドイツは、資本主義経済がもたらす貧困や失業などの問題に悩みます。その解決策として労働者保護政策が展開されますが、労働者保護政策が当時の社会政策の意味です。

今日でいうならば対象範囲は雇用・賃金・労働時間などの労働政策および社会福祉を含む社会保障政策となります。

着任当時からしばらくの間、司法試験では社会政策が選択科目の中にありました。当時も、そして現在も、公務員試験では社会政策の分野から何題かを出題するということが示されております。そこで社会政策に関するテキスト、受験参考書、問題集などがかなりありました（現在も公務員試験分野での問題集が存在します）。そのようなテキストを利用して講義を開始しましたが、私なりの講義スタイルが確立するまでには何年も要しました。

社会政策論は経済学部の学生だけではなく、司法試験、公務員試験との関係もあることから法学部や社会学部の学生も受講できる共通科目です。そこで例年、受講生がかなりの数に上ります。現在の新本館のところに着任当時は6号館がありましたが、その長方形の大きな教室で講義したことも思い起こされます。100番教室がヘボン館の裏手、今の2号館の前あたりにあり、当時の最大の教室でしたが、ここでも講義をしたと記憶しております。

講義に関する限り学生数が多くても特に気になることはありません。出席もとったことがありますが、独特の方法で時間かけずに出席を学生に記入させ、後で簡単に整理できる方法を開発しました。代返のチェックも可能です。この方法は一時期同僚であった林周二先生からも高く評価され、彼自身、利用しておりました。

学生数が多いと困るのはテストの採点です。長い間、夏のテストは正月休みに集中して採点していましたが、2期制となってからはそれもなくなりませんでした。採点ではいつも苦勞しておりました。答案整理、出欠整理、点数合計算出、採点

簿への転記など採点以外の単純業務はいつも家族総動員で処理し、ダブルチェックをしてきました。ダブルチェックのお蔭で、経済学部教授会にテストの採点変更願を出した経験がありません。

着任した当時は、経済学部には第I部と第II部があり、朝8時半からの第1時限から夜9時半までの第8時限がありました。第6時限から第8時限までが原則として第II部学生向けで1時限が80分講義でした。その後、文部省の指導で90分に変更しましたが。

(2) 経済学

1年生向けの経済学も着任当初から担当しました。戸塚キャンパスが開設されたのが1985年ですが、着任直後から戸塚キャンパスには毎年のように出かけました。当時の戸塚駅東口は再開発が始まった直後で雑然としており、教職員用のマイクロバスがなかったのが、学生と共にバスでキャンパスまで行きましたが、当時のバス停は駅から離れたユニーの近くにありました。帰りには戸塚駅まで歩いたり、本郷駅まで歩いたり、北鎌倉まで散策に出かけたり、ブラウン館で宿泊したり、旧東海道を散歩したり、今となっては良い思い出を作ることができました。また帰途、当初は藤田幸一郎先生（一橋大へ）、その後も林周二先生とはよく一緒に品川まで戻り、その間いろいろとご教示いただきました。

法学部向けの経済学を主として担当しましたが、また経営学科向けや全学部向けの経済学も担当したと記憶しております。テキストは千種義人『経済学入門』（同文館）を利用しました。大変分厚いテキストですが、分かりやすく書かれ、経済学全般を網羅しており、大変良いテキストであると思います。その昔、このテキストの旧版で勉強したこともあって利用した次第です。1年生で

すから、皆、テキストを購入します。そこで同文館の方が研究室までしばしば挨拶に参りました。

(3) 労働経済論

労働経済論は2000年頃から担当しました。田村剛先生が長らくご担当されてきましたが、2000年頃でしょうか、産業経済研究所の大部屋で開かれた経済学科会議の最中に倒れられ、その後幸いにも回復されて復帰しましたが、数年経て定年を待たずに退職されたことから、ご療養中および退職後に私が担当することとなりました。

労働経済論は経済学部、特に経済学科の科目ですが、試験などを通じて分かったことはマイクロ経済学やマクロ経済学の基本的な事項を学生諸君が十分に身に付けていないことです。経済学部の学生諸君はもう少し勉学に励まなければいけないと常日頃から考えてきましたが、なかなかそれを指導・徹底するのは難しいと感じております。

(4) ゼミ活動

着任当初からゼミを担当してきております。ゼミ生は総数で305人（男子175人、女子130人）にも上ります。私のゼミは「日本経済と社会労働政策」をテーマとしておりますが、テーマの関係でしょうか希望者が多く、通常は選抜することとなります。あまりにも応募数が多く、やむを得ず24名前後を合格させてゼミを2クラス開設したことも何度かあります。ゼミ学習の効果的な運営がなかなか難しいと感じました。手探りでいろいろと試みました。指定図書の輪読、発表、質疑応答を試みたことがありますが、自分の担当のところしか読んでこない、質問はほとんどしない、質問しても言葉の意味を尋ねる程度、ということでは輪読方式は早々に諦めました。労働問題・社会問題のビデオを見せて意見交換する、ということも

試みました。しかし意見交換が深まりませんでした。

最終的にたどり着いたのが事前研究・討論方式です。これは私がゼミ・テキスト（100ページ程度）を作成し、製本し、学期初めに学生に配布します。テキストには、毎回の討論テーマ、討議事項、事前研究事項、参考文献、参考資料、さらにはゼミ・スケジュール、ゼミ生住所録、ゼミの役割分担などが記載・掲載されています。報告グループの学生（4名）は、事前研究事項4～5項目を手分けして調べてゼミ当日にレポートを全員に配布して報告します。報告に対する質疑があります。その後は、5～7項目の討議事項について順に討議をしていきます。報告および討議をリード・運営するのは司会者グループ（2名）です。討議では結論は必ずしも求めませんが、司会者グループが討議結果を取りまとめます。最後に、すべての学生が事前研究のペーパーを私に提出します。

以上の方法で15年から20年近く行ってきました。学生が手抜きをできないシステムとしました。また学生の誰かが常に発言するというシステムです。私はほとんど発言する必要はありません。また、何らかの事情で私の出席が遅れたり、出られなくても学生だけで進められるシステムです。

当然のことながら1回のゼミに時間がかかります。そこで2コマ連続で行うようにします。長時間一緒にいることが学生間の交流にもプラスに作用したと思います。

2コマ連続ということから、ある時期からゼミ生同士の交流促進活動の一環としてピクニックを始めました。12時半に集合し、午後4時半までピクニックするという内容で4時間ありますと、いろいろな活動が可能です。担当の学生を中心にプログラムを考えてもらいますが、具体的な活動内容は、ファミレスでの昼食の後に、ボーリング

大会、浅草寺参拝、靖国神社参拝、東京地裁で公判見学、東京タワー、六本木ヒルズ、築地市場で食事と見学、もんじゃ焼きとボーリングなど様々なプログラムが企画・実施されました。

また、ある時期から、ゼミ生全員でチャペルアワーに年間2回ぐらいは参加しました。これも2コマ連続のゼミ時間があることの効果で、チャペルアワーに出席したあと、ゼミの開始を30分遅れの1時半に設定しました。多くの学生諸君がチャペル内に入るのが入学式と卒業式だけということがあまりにも多かったからです。明治学院の貴重なシンボルであるチャペル内に入る機会が少ないことからその機会を作ることでありました。加えて、良い話を聞くことができたという狙いもありましたが、概してチャペルアワーでの講話は学生の関心と呼ぶ内容とは程遠く工夫の余地があるな、と常々感じておりました。

ゼミ合宿は、当初は夏休みと春休みに実施しておりました。春休みは3年生と4年生の合同、夏休みは4年生が就職活動と重なることから3年生のみ、というスタイルでした。しかし、春休みが就職活動の時期と重なるようになってからは春休みの合宿を実施できなくなりました。合宿場所としては、当初は民間のホテル・旅館を多用しましたが、八王子の大学セミナー・ハウスも何度か利用しました。1990年代はじめですが、大学セミナー・ハウスで年末に合宿したことがあります。帰る前の日から大雪となり、大変困ったことがありました。その後、伊豆高原に大学のセベレンス館ができてからはもっぱらそれを利用し、また黎明館（大船グラウンド）や高校の山中湖荘も何度か利用しました。さらにその後はラフォーレ修善寺やラフォーレ伊東などを利用してきました。

(5) ゼミ卒業生

ゼミ卒業生の総数は281人までとなりました。卒論作成がある時期から選択必修から外れて以降、時折、卒論を書かない学生が発生するようになり、その経験から、3年次終了時に、4年次のゼミ演習を履修する場合には「必ず卒論を書きます」という本人署名文書を提出させるようにしました。その効果もあって、4年生の段階で脱落する学生はほとんど発生しなくなりました。

概して、私のゼミ卒業生の就職は順調であったと思います。卒業時点で就職の決まっていなかった学生数はトータルで5名以下です。当初のゼミ生はすでに40代半ばに差し掛かっており、大企業の本社課長や執行役員なども生まれています。留学したゼミ生もおりますし、現在、外国で活躍しているゼミ生もおります。女子は結婚・出産後に退職するケースが多かったのですが、最近では育児休業制度を利用して継続就業するケースが増えてきました。

ゼミ生の結婚式にも何回か出席いたしました。ゼミOB・OG会は間歇的に何度か開催しましたが、定期的には開いておりません。今後、どのように卒業生と連絡を取り合うかが課題です。

3 研究生活

(1) 雇用失業分析

われわれ大学教員の主要活動の一つが言うまでもなく研究活動です。私の研究領域は基本的に社会政策に関連する事項となります。社会政策とはいっても範囲は広く、先に述べたように労働者保護政策および社会保障政策が中心的なテーマです。着任当初から、私は労働市場問題、とりわけ雇用失業問題に強い関心を持っておりました。そ

れは今日に至るまで変わっておりません。雇用失業問題と言ってもきわめて範囲は広いものです。幾つかの研究テーマ例を挙げますと、失業動向の分析、失業政策のあり方、女性労働力率の変動要因、ワークシェアリング政策の効果、非正社員の雇用安定政策などなどです。政策問題や動向分析となると、しばしば国際比較分析も派生します。こうした観点での思い出に残る幾つかの研究を述べますと、

一つはオランダのライデンで 1991 年に行われた研究会への参加です。内容は各国から研究者が参集して、それぞれの国の労働市場の実態分析を報告するというものです。私は「The Japanese Labour Market : Its Institutions and Performance」を用意して参加しました。イラクのクエート侵攻に始まる湾岸戦争が始まった半年後、多国籍軍のイラク攻撃が開始された直後です。その影響で航空旅客数が激減し、搭乗機の乗客がかなり少なかったことを覚えております。ライデンに到着したのは週末だったかもしれませんが、早速、シーボルトの持ち帰った様々な日本の資料・事物等を見るためにライデン博物館に向かいました。しかし残念ながら博物館は修築中で閉鎖されておりました。

さて研究会ですが、海外からの研究者は皆同じホテルに宿泊しておりました。そして毎日ホテルからバスで近くの静かな町であるワッセナーにあるオランダ高等研究所で開催される研究会に出かけるのです。各国からの研究者が順番に報告し質疑応答をするという手法です。頻繁にコーヒータムがあり、夕食会があり、参加者間の交流を促進するという仕組みでした。この時の研究成果は後に『Labour Market Contracts and Institutions』（J. Hartog & J. Theeuwes 編, North Holland, 1993 年）として刊行されております。なお、

ワッセナーはオランダの経済政策に関する重要な労使協定、ワッセナー協定、が結ばれた地として今日に至るまで著名です。

研究会が始まる前だったと思いますが、ロッテルダム・エラスムス大学の先生からの依頼で、日本の労働市場について学生に講義をすることを約束していました。バスか電車でロッテルダムに向かったのか、あるいは車で迎えに来てくれたのか定かに覚えておりません。学生への講義の途中で、一人の学生から質問がありました。日本ではどうして外国人労働者の受け入れに積極的でないのか、という質問です。私は、日本が外国人労働者に対して厳しく規制している理由として、女性労働者や高齢労働者の雇用が厳しい状況にあるからという説明をしたのですが、質問した学生は納得せず、講義途中で退席するというハプニングがありました。この時に、大学図書館を案内していただきましたが、驚いたことは、教員の研究室のパソコンで借りたい蔵書を指定すると、自動機械が本を探し出して図書館のカウンターに出てくる、という自動システムです。説明では日本の自動車会社の部品管理を応用したシステムだとのことでした。

以上に関連して外国人に対する講義の経験を話しておきたいと思います。一時期、ホープ・カレッジの学生に対して「日本の労働問題」の講義を受け持ちました。フォーリンプレスセンターから『Labor in Japan』（初版 1988 年、改定版 1993 年、第 2 版 2003 年）を刊行しており、それをテキストとしました。大変記憶に残ることとしては、講義を始めると質問が次から次へと出てきて、講義が予定通りに進まないことです。日本の学生と著しい違いです。ホープ・カレッジの学生のホスト・ファミリーを務めたこともあります。狭い家ですが、長男が学生であったことから相互の交流に良

いのではないかと考え宿泊してもらい、長男に東京を案内させたり、小学生であった次男の運動会にも参加したりしました。

さて、外国人に対する講義の経験としては、他には、JICA(国際協力事業団)や日本労働研究機構の依頼で東南アジア諸国の労働行政担当官への講義やEUからの労使代表団などに対する講義を担当しました。

労働市場分析に関しては、このほか、第91回社会政策学会(金沢大学)で報告したこと(社会政策叢書編集委員会編『弾力化・規制緩和と社会政策』(啓文社、1996年)所収)などいろいろとありますが、これ以上は割愛します。

(2) 人事管理・賃金制度の分析

労働者保護政策に関連して、労働時間政策にもかなり関心を抱き、長時間労働問題に関する研究も行いました。また低賃金問題にも関心を抱き、特に最低賃金および生活賃金問題(公契約条例)もいろいろと研究しました。その他、時間をかけたテーマとして賃金制度問題があります。ここではこの点について少しスペースを割きたいと思います。

賃金制度問題とは、日本企業の賃金制度の改善・改革の問題です。厚生労働省「これからの賃金制度のあり方に関する研究会」に1990年ごろから参加して、日本企業の賃金制度の改革方向の研究に挑みました。同時期以降、日本生産性本部でも様々なテーマの賃金制度研究会に参加することとなりました。こうした研究会では、数多くの日本企業の実態調査を行いました。どのような問題があり、どう改善したらよいのか、という点が私にははっきりしません。そこで思いついたのが外国では賃金制度はどのようになっているか、という疑問です。

そこでアメリカ企業の賃金制度を研究することとしました。調べてみると多数の報酬管理に関する書籍が出版されていることが分かり、早速購入して通読しました。また、アメリカの関係学会に参加することとしました。ACA(American Compensation Association, 現在はWorldatWork)とSHRM(Society for Human Resource Association)です。いずれも研究者および実務家が加入する大組織で、機関誌が定期的に発行されています。

書籍や機関誌を通じて、アメリカ企業の賃金制度の実態がかなりはっきりしてきました。しかし書籍や機関誌だけではどうしてもわからない点はいくつも出てきます。そこで次に考えたのが、アメリカ企業や労働組合を訪問して、実情調査を行うというものです。まずハワイ州ホノルル市の企業が最初です。その後、プロビデンス、ボストン、ワシントン、ニューヨーク、アトランタ等でヒアリングを行いました。特に数多くの企業を訪問したのはロードアイランド州プロビデンスとその近郊都市でボストンが含まれます。アメリカでは大企業本社が全国に点在しており、プロビデンスとその近郊にも数多く存在すること、ボストンにも近いこと、そしてプロビデンスには私が学んだブラウン大学があり、その宿泊施設の利用が可能であったからです。企業調査では1回訪問しただけでは十分な時間を取れず、十分な情報が得られません。そこで繰り返し訪問するという手法を採用しました。何度も訪問した企業を幾つか挙げますと、Citizen Bank, Hasbro, Providence Gas, A.T.Cross, First Hawaiian Bank, Bank of Hawaii, Hawaiian Electric Company等です。こうした実情調査で大変役立ったのが、ACAおよびSHRMの会員名簿です。会員に対してイーメール普及以前は返信用封筒(アメリカの切手を貼付

して)を入れた手紙で、インターネットが広がってからはメールで面会の約束を取り付けるという手法です。現実にはそうした手法でも面会の約束を取り付けるのはなかなか困難で、海外調査の折にはいつも苦労しました。こうした調査研究の集大成として、『アメリカの賃金評価システム』（経団連出版、2001）、『最新 アメリカの賃金・評価制度』（同、2009）を刊行することができました。

なお、研究の一環として、アメリカ以外でもフランス、イギリス、ドイツ、カナダ、韓国で企業訪問し実態調査を実施しました。こうした時にも上述の会員名簿が大変役に立ちました。

日本の賃金制度になりますが、コーディネータを務めた日本生産性本部「新人事賃金研究会」の成果を『成果主義人事・賃金』（全10巻：笹島芳雄監修）として1997年から2008年にかけて刊行することができました。

以上は賃金制度に関する調査に限定して述べましたが、先進諸国における労働時間や高齢者雇用に関する研究の一環として現地実態調査も何度か実施しました。その際の企業訪問調査では上述したACAやSHRMの会員名簿が大変役立ちました。とくに労働時間の現地調査に関してはいろいろな思い出がありますが割愛します。

(3) ハワイ大学訪問研究員等

1992年度は初めてサバティカル年度となりました。その後、2回のサバティカルを与えられました。早くからサバティカルには海外での研究生生活を希望しておりましたが、家庭の事情もあって折角のサバティカルを海外で活用することができませんでした。こうした中で、極めて短期間ですが、1994年8月にハワイ大学にお願いして訪問研究員の資格を得ました。経済学部の韓国人であ

るイム教授の広い研究室に同居させていただき、1か月間過ごすことができました。元来は労働経済学を専攻する教授との情報交換、意見交換を期待してしていたのですが、訪問する少し前に急死されたとのことでした。

ワイキキのコンドミニウムに宿泊し、毎日、バスでハワイ大学まで通いました。ハワイ大学のあるモアナ・バレーは午後になるとスクールが毎日のように発生しておりました。イム教授とは大変親しくなり、一緒に食事などをするなどして過ごしましたし、その後もハワイを出かけた折には訪問しました。

(4) 学会活動

研究活動のために数多くの学会に所属しました。その名前を挙げますと、日本労務学会、社会政策学会、理論計量経済学会、経済政策学会、日本労使関係研究協会、公益法人学会、IIRA(International Industrial Relations Association)、ACA、SHRMです。そのすべての年次大会に出席するのは時間的にも経済的にも大変です。私が特に活動したのが日本労務学会および社会政策学会です。日本労務学会では常任理事、社会政策学会では幹事（他学会の理事に相当）に就任し、学会運営の立場にも身を置きました。

社会政策学会は先にも記したように、1897（明治30）年に誕生し、その後学会内部の路線対立から1924（大正13）年に活動を停止します。戦後に生まれた社会政策学会は戦前の社会政策学会が復活したのではなく、新たに創設されたとされており、連続していないことになっています。しかし戦前の社会政策学会の名称、財産を継承しております。

社会政策学会は年間2回の全国大会があります。東日本と西日本で一回ずつ開催するというこ

ととなっております。私は、在職中一度は明治学院大学で全国大会を開催したい、という気持ちを持っておりました。白金再開発が終了した 2000 年代には開催の舞台が整うこととなりました。そうはいつでもすぐ開催できるというわけではなく、いろいろな事情を考えなければなりません。2007～8 年には学内の社会政策学会員（河合克彦先生、西村万里子先生、岡伸一先生）の総意として開催にゴーサインは出しましたが、それぞれの先生のご都合（サバティカルなど）があり、いつとははっきり決め兼ねておりました。最終的に開催したのは 2011 年 5 月です。

大学の学暦決定が 11 月ということで、教室確保がはっきりしないため、開催期日をなかなか決定できず、学会からはシンポジウム開催の関係上、大会期日の早期決定を求められ板挟み状態となり大変困りました。本格的な準備は岡先生がホープ・カレッジから戻った 1 月に入ってからです。このころ郵便局で実行委員会の振替口座を開設しましたが、その手続きに大変な時間と手間がかかりました。3 月にはプログラム原稿を完成し印刷に回した直後、東日本大地震が襲ってきました。開催が危ぶまれる事態となりましたが、学会本部から特段の連絡もないことから、予定通り作業を進めました。当初は我々で発送作業をと考えておりましたが、大地震の影響で人手確保が困難となり業者に頼むこととしました。準備作業のピークは開催前日の金曜日で、会場の教室が 6 時限まで利用されていたこともあり、夜遅くまでの準備作業となりました。

会場は 2 号館、3 号館とヘボン館を利用しました。土曜、日曜と天候にも恵まれ、最も心配したパソコンやパワーポイントの不具合も発生せず、無事に進行しました。初日の夜の懇親会はパレットゾーンを利用し、大西学長からご挨拶を頂戴し

ました。全体として大成功だったと思いますが、学会員の努力だけではなく、岡先生の大学院ゼミの院生そして私の学部ゼミ生に大変助けてもらいました。

日本労務学会に関しては、大きな仕事として機関誌編集委員会委員長の激職を務め、また現在も務めております。投稿論文はまず私に届き、編集委員に相談して査読者を探して論文を送付し、査読結果をうけとり、コメントを投稿者に送付し、掲載可の論文を中心に書評などを加えて、年 2 回印刷原稿を完成し中央経済社に送付するという業務をすべて一人で処理しています。投稿者そして査読者、査読結果を知るのは私だけという秘密体制でやらなければならないことが業務を複雑に、そして私に集中するようになっていくのです。日本労務学会でも全国大会を明治学院大学ではどうかと声をかけられたことがあります。社会政策学会を先にと考えていたので遂に実現しませんでした。

学会活動で忘れられない思い出としては、このほか、現在も所属会員である ACA および IIRA の国際大会への参加です。ACA の年次大会には 2001 年（テネシー州ナッシュビル）と 2007 年（フロリダ州オランド）に参加し、参加者は 2,000 人を超えておりましたが、2001 年は日本から私を含め 2 人、2007 年は私 1 人でした。IIRA は 3 年ごとに世界大会を開きますが、ブラッセル（1989 年）、シドニー（1992 年）、ボローニャ（1998 年）の大会に参加しました。IIRA の大会には日本の学者が大勢参加しましたので、それはそれで楽しい思い出を作ることができました。

(5) 研究と教育の両立問題

大学教員の責務の一つである研究活動について述べてきましたが、研究活動ともう一つの責務で

ある教育活動を両立させるのはなかなか難しいな、というのが率直な印象です。良い研究活動を行うには寝食を忘れて研究に没頭する必要がある、大変な長時間がとられます。同様に立派な優れた教育を行うには準備、指導、アフターケアなど大変な長さの時間がとられます。誰にも時間の制約があることからすると研究活動と教育活動の両立は大変難しいと思う次第です。その問題を多少なりとも乗り越える一つの方法は、研究および教育の両面において、適切なサポート体制を大学が用意できるかどうか、という点でしょうか。

4 学内の諸活動

(1) 学生の課外活動のサポート

教育研究活動を主として述べてきましたが、学内のそれ以外の活動について述べたいと思います。まず、第1は学生の課外活動へのサポートです。1990年代半ばに田村剛先生から体育会フェンシング部の部長を引き継ぎ、退職時まで継続しました。私自身は剣道の経験はありますがフェンシングについてはずぶの素人であり頼りない部長でありました。引き継いだ当時は10名を超える部員がいて、活動は活発に行われておりました。しかし、新部員の獲得が次第に難しくなり2000年ごろには休部のやむなきに至りました。当時、戸塚校舎で法学部新入生向けの経済学を担当しておりましたので、講義の折にフェンシング部の状況を話したところ、高校時代にフェンシングをしていた学生がやって来て入部したいという嬉しい申出があり、同時に同級生2名も参加することとなり、無事復活しました。しかしその後も人数はあまり増えず厳しい状況が続き、ついに私の退職直前の2011年には再び休部に至りました（2012年度に入って新部員の加入があり復活しました）。

フェンシング部を長く見守ってきましたが、OB・OG会の絆の強さにはつくづく感服致しました。毎年、何度も会合を開いているようですが、私は総会とか納会でOB・OGの皆さんと親しく交流させていただきました。

OB会と言えば、硬式野球部とも付き合いがありました。1990年代半ば頃、真崎隆治先生のサバティカル（フランス渡航）により、硬式野球部の臨時部長を引き受け、駒沢球場や東村山グラウンドでの公式戦の応援にも出向きました。臨時部長の最大の課題は枯木監督の後任獲得問題でした。大学職員でもあった枯木監督がその年に定年を迎えるということで後任の採用を大学に認めてもらうことが課題でした。OB会とは何度も協議をし、後任候補を立てて交渉しました。しかし、数多くのクラブの中で硬式野球部だけに専任監督がいるという変則的な状況から、後任を獲得することはできませんでした。後任監督問題の協議とか年末のOB会の場として明学OBが経営していた築地スエヒロが使われました。築地スエヒロは経済学部のような会合でも利用しました。個人的にも利用しましたが、いつ頃でしょうか無くなってしまい、大変残念に思う次第です。

体育会の活動では2004年からの2年間体育会長を務めました。役割は部長会の開催、体育会執行部の相談相手、体育会機関誌などへの寄稿、体育会会合への出席、各部の周年行事への出席などです。

文化系クラブの公認団体であるコール・ディ・ゾンネの部長も久世了先生の後を引き継ぐ形で1990年代半ば以降、退職するまで務めました。コール・ディ・ゾンネは元来は合唱団だったようですが、次第にバンド編成の音楽クラブに発展していきました。フェンシング部と異なって部員確保に困ったことはなく、常時30～40名の部員を

確保し運営しておりました。クラブ活動は活発で毎週の練習に加えて、合宿、ライブなどを積極的に行っており、私は横浜や鶴見での演奏会に出かけて、活動状況を確認してきました。体育会系のクラブと比較しますと、どうしてでしょうか。コール・ディ・ゾネはOB・OG会の結束が弱いという印象を受けました。文科系クラブに共通する現象でしょうか。

(2) 就職部の活動

1997年から1999年の3年間、大場学長の下で、就職部長（現在はキャリアセンター長）を務めました。私の専門分野の一つが雇用問題ですから、学生の就職問題には大変関心がありました。当時から就職活動は3年生の秋から本格化するようになっており、就職ガイダンスは9月に行いました。採用活動でのインターネットや携帯電話の利用はまだそれほどではなく、学生の情報収集は紙媒体であり、就職部資料室は学生への情報提供において大きな役割を担っておりました。他大学ではどのように学生指導をしているかを知るために、立教大学および青山学院大学に話を聞きに出かけました。また学会参加のついでに、広島大学を訪問し情報収集しました。立教大学では日曜も資料室を開いていること、広島大学では3年生の6月に就職ガイダンスを行うことなどを知り、明治学院大学でも就職支援の充実化に努めたところです。

就職部長に在任していた時期は就職氷河期と言われ、大学生の就職環境がかなり悪化しました。

現在でもそうでしょうが、就職部員が手分けして、大企業や学生が就職した企業を訪問して、本学学生の継続採用をお願いしました。私は丸の内とか大手町地区の大企業を中心に廻りました。事前の予約をせずに、飛び込み営業の形でビルからビルへと人事部を訪問するのです。幸いなことに

どの企業でも担当者が出てきて親切に対応してくれるのは助かりました。またホテル白金会とか東京白金会など卒業生の種々の集いにも参加し、OBOGの方々に後輩の就職支援をお願いして廻りました。

一時期、就職課長が欠員となり、就職課長を兼務したことがあります。就職部では次長以下の部員が週2回ほどだったかと思いますが朝8時45分から打ち合わせを行っておりました。兼務している時には、当然のことですが、打ち合わせには出席しなければなりません。数か月間だったかと思いますが、大変忙しく感じたときでした。

当時、現在の2号館1階に国家資格試験の受験対策用の資格取得サポートセンターを設置し、それが就職部の管轄となりました。受験を目指す学生が専用のロッカーを確保でき、仕切った部屋に机を用意して、集中して勉強できる体制を整えたのです。そこで資格取得サポート運営委員会を設置して、毎月、各学部の意見を吸収することとしました。センターはその性格から朝早くから夜遅くまで開いていなければなりません。職員の通常の勤務時間よりもかなり長くなります。そのためスタッフの確保が大きな問題でした。その後、サポート・センターは廃止されて、コンピューター室に代わってしまいました。

(3) その他の学内活動

26年も勤務したのですから、学内での活動で言及しなければならないことがたくさんあります。経済学科主任には1992年に就任し増田学部長を補佐致しました。ヘボン館の8階の会議室で教授会を開いていた時代です。暑い盛りには冷房はなかったのであまり効果のない扇風機が回っていました。月1回ではありますが、ノンストップの教授会は毎回夜遅くまで続きました。教授会が

終わるとホットし、執行部は品川で打ち上げをす
るとというのが通例でした。

大学院主任として、産業経済研究所主任として、
あるいは大学評議員としての活動でもいろいろな
ことがありました。また大きな仕事として、教員
採用や同僚の昇任審査の業務、入試問題作成や入
試の試験監督業務もあります。学内業務ではあり
ませんが、経済学部の委嘱を受けて、大学基準協
会の審査委員として、関西学院大学および京都学
園大学の審査も行いました。慶応大学商学部の採
用人事に関わったこともあります。

ひとつ一つの業務にいろいろな思い出がありま
す。大学評議員は 2 度にわたって務めました。が、
大学評議会での審議はほとんどは原案通りに順調
に進みます。その中で最も紛糾したのが政治学科
の採用人事の件です。現役政治家の教員採用が提
案され、賛否両論があり結論が出ず、2 度にわた
って審議し、最終的には評議員一人ひとりが意見表
明する方法により原案が否決されました。

入試に関しては、2006 年 1 月のセンター入試
の時でしょうか。初めて英語のヒアリング・テス
トが導入された年です。金曜日の夕刻から雪が降
り出し、翌朝には大変な大雪となりました。戸塚
駅近くの古ぼけたホテルに教員一同宿泊し、朝早
く戸塚キャンパスにマイクロバスで急いだことが
ありました。また勤務を始めて間もない時、入試
監督で答案の回収漏れ事件を引き起こしてしま
いました。回収し枚数をカウントしたはずなのに
すが、原因ははっきりしませんが、そのような大き
なミスを起こしました。苦い思い出です。幸いに
して出題においてはミスを起こしたことはありません。

5 社会活動

大学教員の主たる活動として研究・教育活動、
学内業務があります。その延長線上に学外での社
会貢献活動があります。私の場合、それほど特筆
できる学外活動はありませんが、幾つかの活動を
述べておきたいと思います。

社会保険労務士試験の試験委員として 2 年間出
題を担当したことがあります。社会保険労務士は
大変人気のある国家資格です。書店の棚を見ます
と社会保険労務士試験の受験参考書がたくさん並
んでおり、人気のある試験であることが分かりま
す。例年、6 万人前後の受験者があり、合格率は
7~8% 程度の難関試験です。当時、試験委員は公
開されておらず秘密でした。知り合いが受験する
ことを知っておりましたがもちろん試験委員であ
ることを口外していません。試験は毎年 8 月下旬
ですが、試験終了後、模範解答の説明会が受験
予備校で開催されます。私の出題した問題に対し
てどのような解説をするか興味があったので模範
解答の説明会に参加したこともあります。出題で
難しいのは、大学入試問題と同じで、基本的で重
要な良い問題を出題すると正解率がきわめて高く
なりますので、どうしても落とすための出題、そ
して正誤がきわどい問題となりがちな傾向があり
ました。出題業務が大変なこともあって、早々と
試験委員を辞退しました。

中央労働委員会関東地方調整委員会の委員・委
員長を 10 年務めました。業務内容は、独立行政
法人、国営企業など公共部門の労働争議の斡旋・
調停の仕事です。現実には本務の労働争議事件が
それほど発生せず、したがって、定例会議の内容
は労働問題の勉強会といった感がありました。公
益委員は私のほか、労働法学者の先生方でいろ

ろな面でご教示をいただき、大変勉強になりました。中央労働委員会のある御成門に月 2 回程度は出かけたことから、芝増上寺をはじめとして御成門付近にもかなり愛着が生まれました。そもそも中央労働委員会の存在している土地は、協定会館という戦前には社会政策の総本山であった組織の建物のあった土地です。

橋本首相時代の経済審議会の専門委員となり、分科会に所属し、実質的に最後の経済計画である「構造改革のための経済社会計画」(1995~2000 年度)の策定に参画しました。

2000 年ごろでしょうか厚生労働省「男女間の賃金格差に関する研究会」に座長として参加しましたが、参加できて良かった研究会の一つです。今日に至るまで「公正な賃金」とは何かを考えるきっかけとなった研究会だからです。この研究会では、研究会報告書の結論部分の原案を私が執筆しました。学生と大船グラウンドにゼミ合宿した折、どのように書くか悩んでいたことを思い出します。

影響力のあった研究会として人事院「能力、実績等の評価・活用に関する研究会」があります。これは国家公務員の人事評価制度を提案する研究会であり、座長として参加しました。研究会の成果がそのまま利用されたわけではありませんが、

その後に導入された国家公務員の人事評価制度の基礎を提案した研究会です。

このほか、経済企画庁、総理府、通産省、国土交通省、農林水産省、東京都、日本生産性本部などでの研究会、委員会などの活動に参加してきました。労働者保護政策を主たる研究領域とする立場からしますと、これらの社会活動が政策研究の参考となることが多々ありました。

6 今後に向けて

明治学院大学の定年を迎え、正教員としての教育・研究活動は終了しました。しかし、現在、明治学院大学経済学部の非常勤講師として引き続き教育活動に参加しております。大学からはかなりの量の資料、書籍を持ち帰ったほか、かなりの量の資料・書籍の PDF 化を行いました。学会活動も続けております。しばらくの間、これまでとあまり変わらない生活を送ろうかと考えております。インターネット上に研究所を開設したいとも考えております。今日、人口高齢化が進行し、65 歳以上人口が 3000 万人を超える時代です。定年退職後も生き生きしていかないと社会全体が沈滞しかねません。私は引き続き生涯現役のつもりで積極的に活動を続ける所存です。